ヨハネの第三の手紙11節 「悪い例と良い模範」

1A 真理にある愛

1B 働き人の受け入れ

2B 忠実な行い

2A 悪い例

1B かしらになりたがっている者

2B 意地悪なことば

3B 受け入れ拒否

4B 受け入れた者の追放

3A 人々と真理の証し

1B 評判の良い人

2B 御霊の満たし

3B 良い実

4A 善の見習い

1B 悪の見習い

2B 真理に立つ勇気

本文

ヨハネの手紙第三を開いてください。先週に引き続き、とても短い手紙です。午後に一節ずつ見ていきますが、今朝は 11 節に注目します。「愛する者よ。悪を見習わないで、善を見習いなさい。善を行う者は神から出た者であり、悪を行う者は神を見たことがない者です。」

前回に引き続き、教会の受け入れについて学んでいきます。前回は、教会にやって来る、よそからの人々、福音の働き人を受け入れる時に、惑わす者たちもいるので気をつけなさいという、ヨハネの注意が書かれていました。イエス・キリストが人として来られたことを告白しない者たち、反キリストが大勢出て来ているので、そのような者たちは受け入れてはいけない、挨拶もしてはいけない、ということです。

1A 真理にある愛

1B 働き人の受け入れ

今回は、その反対です。惑わす者については受け入れていけないのですが、それは裏返せば、真理のうちを歩んでいる兄弟であれば、心を広げて受け入れなさいということです。当時の教会は、家の中で行われることが多く、少人数での集まりなので、福音のための働きをしている人々は、今より、もっと流動的に、教会間で行き来がありました。いろいろな人が来ますが、真理のうちを歩ん

でいる人々には、いろいろな働き、いろいろな賜物、いろいろな奉仕があります。同じ御霊によるものなのですが、キリストのからだはとても多様です。

ヨハネの、この第三の手紙を受け取ったガイオは、そういった働き人を、よく受け入れていった兄弟でした。「[5] 愛する者よ。あなたは、兄弟たちのための、それもよそから来た人たちのための働きを忠実に行っています。」

受け入れるのには、いろいろな労苦がともないます。まず、キリストにある寛容な心です。その人には、もちろん人格があり、性格があります。個性もあります。自分が自然には合わない人もいるでしょう。けれども、キリストにあって、それぞれがからだの一部であり、それぞれ異なるから良いのです。そして、欠点があるように見える人も、キリストのゆえに、恵みがあるから受け入れることは、みこころにかなっています。

そこには、相手を敬うへりくだりが必要でしょう。「何事も利己的な思いや虚栄からするのではなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。（ピリピ 2:3）」主は、ご自身の弟子に、いろいろな人を受け入れました。直情的な性格のペテロもいれば、過激な国粋主義者熱心等のシモンもいました。ローマの犬であり、私欲を肥やしていた取税人マタイもいます。疑い深いトマスもいました。よくもまあ、こんなに個性の強い人たちが集まったものだと思いますが、主は受け入れました。同じように、私たちは兄弟たちを受け入れることによって、キリストに倣う者となります。

2B 忠実な行い

そして、ガイオは、「忠実に行っています」とあります。一回限りの受け入れではなく、また、受け入れたら中途半端にすることなく、彼らが他の教会に送り出すところまで、最後まで責任を持ちました。小さなことなのですが、それに忠実だったのです。主のしもべとして必要なことは、忠実です。五タラント、また二タラントを任されたしもべに、主人はほめました。「マタ 25:21 よくやった。良い忠実なしもべだ。おまえはわずかな物に忠実だったから、多くの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。」

2A 悪い例

このように、ヨハネはガイオの行いをほめていますが、教会の中に悪を行う者がいました。彼の名は、ディオテレペスです。9 節をご覧ください。「私は教会に少しばかり書き送りましたが、彼らの中でかしらになりたがっているディオテレペスが、私たちを受け入れません。」

1B かしらになりたがっている者

ディオテレペスという名の意味は、「ゼウスに愛された者」であります。ゼウスとは、ギリシアの神々の主神、つまり神々のかしらのような神です。その名のごとく、自分はかしらになりたがってい

るというのです。

教会には罪をもった人間が集まっていますから、残念ながら、世の中にあるような人間模様が教会の中にもあります。神の民の中で、主によって立てられたしもべではなく、自分自身がかしらになりたい者が現れることがあります。イスラエルの中では、コラという者が現れました。

民数記 16 章に出てきますが、時は、モーセとアロンが荒野の旅を率いていた時です。カデシュ・バルネアで、不信仰のために約束の地に入らずに、一世代が死に絶えるまで荒野をさまよわなければいけなくなりました。その後の出来事です。自分たちが神に罪を犯したから、荒野をさまよっているのに、それを神に立てられた指導者のせいにしたがっている者たちが、少なからずいました。そして、約束の地へ導いていないのに、それでも民の上にモーセとアロンが立っているとして、不満に思っている者たちがいました。

シナイ山のふもとで律法が与えられている時は、大きな不満はありませんでしたが、荒野の旅をしてから不満が出てきます。同じように、教会においても、教えを聞いているうちは落ち着いていても、いざ、何か体を動かして奉仕をしたり、働きに入れば、こうした肉の戦いが起こります。そして、そこで自分の肉を御霊によって殺すのはなく、肉に従って歩む者が出てきます。元々、自分がかしらになりたがっていることを心に隠していましたが、神の民の間で不都合や困難なことが起こると、その肉の欲望のままに動く者が出てきます。

イスラエルの間では、コラがそうでした。彼は、レビ部族のケハテ氏族です。幕屋の中にある、用具を運搬する奉仕でした。彼は、それだけ神のご臨在の近くで働く恵みがありました。しかし、その中に入って、いけにえを献げる祭司ではありません。それはアロンとその息子たちです。それで、アロンに妬んだのです。「民 16:3 彼らはモーセとアロンに逆らって結集し、二人に言った。「あなたがたは分を超えている。全会衆残らず聖なる者であって、【主】がそのうちにおられるのに、なぜ、あなたがたは【主】の集会の上に立つのか。」」

一見、もっともなことを言っていますね。すべての人が聖なる者であって、主にあってみな一つ、平等だ。それなのに、あなたがたは分を越えて、主の集会の上に立っているということです。今の平等思想で見れば、かなりまともに聞こえます。そうです、かしらになりたがっている者は、口が立ちます。人々に影響力を持っています。同じ不満を持っている者たちを自分に引き寄せ、また、人々の思いを煽って、アロンとモーセに反抗するように仕向けるのです。

主の働きは、民主主義や平等主義ではありません。キリストにあって、みな一つです。それぞれが兄弟であり、姉妹です。そこに、差別はありません。しかし、賜物があり、奉仕があり、働きがあり、それぞれが異なります。自分が願って、ある奉仕ができるのではありません。主が恵みによっ

て、それぞれを立てるのです。逆を言うと、恵みではないところで、自分の能力や力、願いでその働きをしてはいけないのです。ここは、民主主義でも平等主義でもなく、キリスト主義、キリストの主権の集まりですから。

2B　意地悪なことば

そして、10 節を見てください。「ですから、私が行ったなら、彼のしている行為を指摘するつもりです。彼は意地悪なことばで私たちをののしっています。」ディオテレペスは、ヨハネたちについて、「彼は意地悪なことばで私たちをののしっています」とあります。相手の上に立つために、すでに立てられている人々を徹底的にこき下ろします。使徒たちの手紙に、何度となく、兄弟の悪口を言うことに対する警告が書かれています。「ヤコブ 4:11 兄弟たち、互いに悪口を言い合ってはいけません。自分の兄弟について悪口を言ったり、さばいたりする者は、律法について悪口を言い、律法をさばいているのです。もしあなたが律法をさばくなら、律法を行う者ではなく、さばく者です。」

3B　受け入れ拒否

そして受け入れ拒否です。「それでも満足せず、兄弟たちを受け入れないばかりか、受け入れたいと思う人たちの邪魔をし、教会から追い出しています。」

第二の手紙では、イエス・キリストが人として来られたことを告白しない者が、惑わす者、反キリストであるから、決して受け入れてはならない、挨拶してもいけないという注意がありました。悪い行いをともにしてしまうからです。けれども、真理の中を歩んでいるにもかかわらず、それでも受け入れないということは、その拒絶自体が、悪い行いであります。兄弟だということだけで、水一杯を与えれば報いがあると言われたのは、私たちの主です。

教会によっては、牧師がとっかえ、ひっかえ変わっているところがあります。役員会があり、そこが辞めさせるのです。辞めさせられた牧師の話を聞いたことがあります。その理由が、「家庭訪問をしなかった」とかいうものです。パウロが、次のようにテモテに指導しています。「Ⅰテモ 5:19-20a 長老に対する訴えは、二人か三人の証人がいなければ、受理してはいけません。罪を犯している者をすべての人の前で責めなさい。」罪を犯しているならば、追い出すべきです。しかも、二人か三人の証人が最低、いなければその訴えを受け入れてもいけません。

罪でも何でもない理由でやめさせるということは、おそらく、その牧師たちに問題があるのではなく、兄弟を受け入れない役員会にあるのです。このディオテレペスのように、自分たちが教会を私有物にしているのです。

4B　受け入れた者の追放

そして、働き人を受け入れないどころか、「受け入れたいと思う人たちの邪魔をし、教会から追い

出しています」とのことです。受け入れようとする人たちを、教会から追い出します。自分は、ヨハネたちが自分たちを支配するなとかいって、意地悪なことを言っていたのでしょう。けれども、実際は、自分の考えに合わない者たちをことごとく排除する者となっているのです。

人をさばく者は、さばかれると主は言われましたが、他の人をさばく人は、結局、そのさばいていることを自分自身が、もっと大きなレベルで行っていることが多いのです。

3A 人々と真理の証し

以上、見てきたことが 11 節にある、「悪を行う者」です。しかし 12 節には、善を行う人の名が出てきます。「デメテリオについては、すべての人たちが、また真理そのものが証ししています。私たちも証しします。私たちの証しが真実であることは、あなたも知っています。」デメトリオは、おそらくは、ガイオに対するヨハネの手紙を携えた人なのだと思います。ヨハネがデメトリオを推薦していると思われます。彼は「善を行う者」です。

1B 評判の良い人

一つは、「すべての人たちが」と言っています。要は、評判が良い人だということです。教会に仕える人について、聖書に出てくるのは、いつも評判の良い人です。給仕をする人を七人、使徒たちが選ぶ時、こう言いました。「使 6:3 そこで、兄弟たち。あなたがたの中から、御霊と知恵に満ちた、評判の良い人たちを七人選びなさい。」パウロもテモテに、監督を任命する資格として、「Ⅰテモ 3:7 教会の外の人々にも評判の良い人でなければなりません。嘲られて、悪魔の罠に陥らないようにするためです。」と言いました。

2B 御霊の満たし

そして、「また真理そのものが証ししています」と言っていますね。これは大切です。人当たりが良かったとしても、真理の中にいなければ、意味がありません。イスカリオテのユダは、悪を行っていましたが、それは他の人たちには知られていませんでしたから、評判が良いだけでは、善を行う人の証拠ではありません。御霊が真理なので、それぞれに与えられている御霊が、その人について証ししてくださいます。先ほどの、七人の給仕の人たちも、「御霊と知恵に満ちた」と言っていましたね。御霊の証しがあるのです。

3B 良い実

そして、良い実がその人から結ばれているかどうか？は、大事です。「ヨハ 15:16 あなたがたがわたしを選んだのではなく、わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命しました。それは、あなたがたが行って実を結び、その実が残るようになるため、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものをすべて、父が与えてくださるようになるためです。」

4A 善の見習い

このようにして、「愛する者よ。悪を見習わないで、善を見習いなさい。」という勧めがあります。ディオテレペスの例には見習わないで、デメテリオについて見習いなさいということです。

1B 悪の見習い

けれども、ここで私たちには信仰の決断があります。「多勢に無勢」という言葉があるように、悪を行う者がかしらになりたがっていると、その悪の力は、またたく間に広がっていきます。先に分かち合った、アロンとモーセに歯向かったコラの例を見ると、他の部族の有力者たちも協力していました。そして、族長たちがなんと 250 人もやってきて、二人に詰め寄っています。コラは会衆全体に語りかけているので、その反逆は伝染病のように、会衆を蝕んでいます。コラたちが滅んだ後でさえも、翌日、会衆が、二人について「主の民を殺した」と不平を鳴らしているのです(16:41)。

アロンとモーセが、主によって立てられていると認めていても、目立った動きをする人々があまりにも目立っているため、声を出して、主のところにつくことは難しくなります。しばしば、サイレント・マジョリティーという言葉があります。賛成している人は多数いるのだけれども、彼らはことさらに声を上げないという意味です。その反面、ノイジー・マイノリティーという言葉があります。本当は少数派なのに、声を上げて騒がしくしているという意味です。悪を行う者たちの方が、より声が大きくなり、善に見習うことは勇気が要るのです。

2B 真理に立つ勇気

しかし、善を見習うことを選ぶのには、報いがあります。主からの報いです。同じく民数記で、イスラエルの民が荒野の旅で、モアブの草原まで来ている時に、宿営の中にモアブ人の娘たちが入り込んできました。彼女たちはイスラエルの男たちと淫らなことをして、神々を持ち込んでいました。レビ人が選ばれて、神々を拝んだ者たちを殺すようにモーセは言いつけますが、大胆不敵にも、シメオン族の族長の息子が、女といっしょに天幕に入っていったのです。だれも、止める人がいません。しかし、そこで祭司アロンの孫であるピネハスが、その天幕に入り、二人を腹を刺して殺しました。それで、神罰がやんだのです。

主は、ピネハスに対して約束されました。「民 25:12-13 見よ、わたしは彼にわたしの平和の契約を与える。これは、彼とその後の彼の子孫にとって、永遠にわたる祭司職の契約となる。それは、彼が神のねたみを自分のものとし、イスラエルの子らのために宥めを行ったからである。」彼の行いによって、これ以上、多くの人が神に罰せられずに済んだのです。

善を行う人に見習うとは、このように、多くの場合、大きな流れに逆らうことになります。空気に逆らうことになります。ピネハスのように、たった一人になってしまうかもしれません。それでも、主のがわに着くならば、主にあるサイレント・マジョリティーは立ち上がるのです。